

都市と祭り

財団法人ダム水源地環境整備センター理事

(前 都市研究センター研究理事)

山口 智

都市の祭りにはいろいろなものがある。また、祭りは都市に賑わいをもたらす。本稿では、都市と祭りの関わりについてみてみたい。

祭りの多様性

民俗学者の柳田國男は、祭りを「祭り」と「祭礼」に区分した。柳田は、祭事を営む人と、それを司る神官等のみによって行われる宗教的行為を「祭り」と呼び、それに直接関わりのない見物人が加わったものを「祭礼」と呼んだ。例えば、個人の家の地鎮祭や上棟祭は、通常、施主、工事関係者と神職のみによって行われる。これに対して、祭典にそれを見る人々が加わった祭礼は、見られることを前提としたものとなり、華やかなものになる。祭礼とは、すなわち「見られる祭り」である。この区分では、都市部の大きな神社でも神職のみで行われる月次祭のような場合は「祭り」ということになる。

また、今日の祭りには、神社の御祭神を中心とする宗教的、伝統的行為である本来の祭りと、神社と無関係な世俗的行事（イベント）としての「神なき祭り」がある。

なお、祭り（マツリ）の語源については、神の来臨を「マツ」ことに由来するという説もあるが、「マツラフ」という語に

由来するという説が有力である。マツラフは、マツ（奉）ルに接尾語フのついた語であり、服従する、従いつく、といった意味であり、神に従う、神に拝謁するといった意味であるとされる。このように語源的に見ても、本来の祭りは、神を祭るものである。神を祀る人々が心を一つにして、神を称え、神に感謝し、神とひと時を共にするのが祭りである。祭りには神輿や山車（だし）が出ることが多い。神様を乗せた神輿が練って回る町は、その時神聖な神様の土地となり、神様の町となるのである。

また、祭りは、ハレの時間、空間であり、ケ（普段の時間、空間）に対するものとされる。その意味では、野球や相撲の優勝パレードなども一種の祭りであり、博覧会、国民体育大会なども祭りといえよう。

なお、このハレとケというのは民俗学の伝統的な分け方である。ハレは、晴れの日、晴れ舞台、晴れ着などといわれるように普段の生活とは異なり、精神的な緊張と興奮を迫る機会であり、冠婚葬祭や祭りすなわち非日常がこれに当たる。これに対して、ケは普段の生活、すなわち日常を指す。このハレとケの対立にさらに「ケガレ」という概念を付け加え、ケガレとは「毛が枯れること」又は「気が枯れること」、つまり日常生活（ケ）を営む気力の衰えることであり、それをもとの

元気な状態に回復させるために、ハレの行事を行うという説もある。

戦後における祭りの流れ

日本社会における祭りの歴史は連綿としたものであるが、戦後における伝統的な祭りの復活や新たに生み出された祭りの大きな流れは、次のようなものである。

(第1期) 昭和20年(1945年)からの約10年間は、戦争で中断した祭りの復興期であった。昭和21年に阿波踊りが早くも復活し、昭和22年には京都の祇園祭、長崎くんち、相馬野馬追い、仙台七夕まつり、昭和24年には大阪の天神祭、昭和30年には青森のねぶた祭、京都の時代祭、昭和27年には東京の神田祭、山王祭などが復活した。

またこの時期には、経済復興、地域おこしを目的とするとともに、都市の新たな門出を祝い、また、観光客の誘致を目的とする新しい祭りが登場した。このような祭りの例として、昭和26年に始まった平塚市の七夕まつり、昭和27年の金沢の百万石まつり、昭和29年の高知のよさこい祭り、昭和30年の名古屋まつりなどがある。

(第2期) 第2期は昭和30年(1955年)から昭和48年(1973年)の第一次石油ショックまでの高度経済成長の時期で、日本経済は戦後の世界の奇跡と言われるほどの成長を遂げ、人々の物質的生活は豊かになったが、祭りにとっては不振期で、都市部でも地方でも全般的に祭りが

それまでの勢いをなくした。都市部への人口集中は、東京をはじめとする大都市の過密と農山村の過疎化をもたらし、これが祭りにも影響を及ぼした。過疎の村では祭りの担い手が減り、それまでの規模を縮小したり、中断を余儀なくされる祭りが出てきた。都市部でも、人々の関心がモノの世界に集中したためか、伝統ある祭りでも継続が危ぶまれるような事態も生じた。高度経済成長のひずみが祭りにも及んだといえる。

また一方、この時期には、大きな祭りの中には、京都の祇園祭のように観光客を重視した祭りの運営が見られるようになった。祇園祭では、この時期に山と鉦の巡行路をそれまでの狭い通りから大通りに変えたり、有料の観覧席を設けたり、7日の間隔を置いて行われた2つの行列を一本化するなどして観光客の便宜を図った。見物する人を重視するという一方で、柳田國男のいう「祭礼」化の度合いがより強まったといえる。

また、昭和45年(1970年)の大阪での万国博覧会の前後には、地域の伝統にこだわらない新しい祭りが次々と姿を現した。昭和43年の東京の大銀座まつり、昭和46年の神戸まつり、昭和47年の東京の高島平まつりなどである。また、万国博覧会それ自体が壮大な祭りであったといえる。

(第3期) 第3期は、第一次石油ショック以後昭和62年(1987年)の第四次全国総合開発計画(四全総)までの時期である。この時期は、高度経済成長が終わり、急速な経済成長がもたらしたひ

ずみを是正しようとした時期である。「モノの時代」から「こころの時代」へ、ともいわれるようになった。こうした風潮の下で、勢いをなくしていた大都市部の伝統的な祭りにも元気が戻り、また、大きな祭りのなかった大都市や郊外のベッドタウンで祭りが新たに作り出された。元気を取り戻した伝統的な祭りの例としては東京の神田祭や三社祭が挙げられる。また、新興の祭りとしては、昭和 51 年の宇都宮市のふるさと宮まつり、昭和 52 年の千葉市民フェスティバル、浦和おどり、ひろしまフラワーフェスティバルなどがある。

(第 4 期) 第 4 期は、昭和 62 年(1987 年)に四全総が制定されて以降の時期である。四全総は、多極分散型国土の形成を目標とし、そのために「個性豊かな地域づくりの推進」の必要があるとし、その手段の一つとしてイベントの活用を具体的な施策として掲げた。こうした国の方針を受けて、多くの市町村がイベントによる地域活性化に取り組むようになった。平成元年(1989 年)には、全国で 39 市が市政 100 年を迎え、これを記念した地方博が相次いで開催された。また、平成 4 年には、「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」ができ、祭りやイベントを後押しした。こうした中で、多くの祭りやイベントが作り出され、現在に至っている。

都市の祭りの特徴

都市の祭りにはいくつかの特徴が見られる。その全部をうまく整理して記述するのはなかなか難しいが、主なものを挙げると次のとおりである。

(見られる祭りとしての革新性)

都市の祭りの多くはまちを賑わすものであり、柳田の区分に従えば「祭礼」すなわち「見られる祭り」である。この見られる祭りであることから、都市の祭りには見るものを楽しませる様々な工夫がなされ、華やかな趣向が付け加えられている。

また、都市は文化の創造の場であり、革新の場であるといわれる。都市においては、新しい祭りやイベントが創造されることも多い。都市はそれ自体見物の対象でもあり、文化豊かな都市にはそれだけの見所が備わっているものである。それだけに、都市の祭りやイベントは見物人を呼び寄せる力を潜在的に持っており、新しいものが創造され易いといえよう。また、都市の祭りは、それ自体重要な、文化的創造の場である。例えば、祭りにつきものの神輿も都市の祭礼から生まれたといわれる。また、祭りのときに神様に見ていただくために奉納した神楽が芸能の出発点であり、祭りは多様な音楽、舞踊、演劇などを生み出す機会であった。

また、大都市における伝統的な祭りは、「古式ゆかしく」執り行われるものと思われているが、京都の祇園祭にみられるように伝統を守りつつ少しずつ新しい工夫を付け加え、活性化しているといわれる。祇園祭では、それぞれの山や鉾の装いが少しずつ新しくなっている。これに対

して、農村の祭りで過疎化の中で滅んだものの中には、古いものを守ることにこだわり、新しい工夫をしなかったものが少なくないとされる。

(地域と人々の変身)

祭りの日には、都市はいわば劇場のようになるのである。祭りを演じる者とそれを見て楽しむ者とがハレの時間と空間を共有する。また、祭りは、ケ(普段)の時には都市の中の何の変哲もない界限、場合によってはさびれた感じのする商店街などにひと時の賑わいをもたらし、活力を回復させる。これが祭りの持つ不思議な力であり、伝統の力である。

祭りは、人々を変身させる。祭りに参加する人たちは、普段の日にはそれぞれの職業に従事しているが、祭りの日には職業とは関係なく、それぞれの役割を受け持つ。神輿を担ぐ人たちは、揃いの印半纏を着、威勢良くなる。太鼓をたたく人もいれば、神饌や直会のご馳走の準備をする人もいる。また、祭りの参加者は、地元に住む人たちだけではなく、祭礼の行われる地域の会社や事務所に勤務する人々も加わることがある。また、裏方として警察や消防関係者も祭りの安全確保のために尽力する。例えば、祇園祭のような大きな祭りでは、鉾や山を建てる大工方、飾り付けをする手伝い方、車を扱う車方、楽器を鳴らす囃子方などに多くの人に従事する。また、見物する人々もハレの時間と空間の中で晴れ晴れとした気持ちになる。いわば人々が町の衆になるのである。

(夏の祭りは都市の祭り)

夏の祭りは、そのほとんどが都市に起源をもっている。もともと夏祭りは、人口集中の結果発生してくる疫病への恐れから生まれた、疫病退散を神に願う事から始まったものが多いとされる。都市部において疫病が起りやすいのは高温多湿の夏であることから、夏に祭りが行われるようになったというわけである。

これに対して、農村の祭りは春と秋に多いが、これは農業のサイクルに合わせたものである。まず、春の耕作開始の前にその年の作物の順調な生育と秋の豊かな実りを神にお願いするのが祈年祭(きねんさい)であり、秋の収穫を喜び、神に感謝申し上げるのが新嘗祭(にいなめさい)である。

また、都市の夏祭りの中には全国的に有名なものも多い。京都の祇園祭、大阪の天神祭、秋田の竿灯、弘前市のねぶた祭、青森市のねぶた祭、山形の花笠祭、仙台七夕まつり、博多の祇園山笠、等である。このほか、立夏後に行われる有名な祭には、京都の葵祭、三船祭、東京浅草の三社祭、神田祭などがある。ただし、これらの祭りの起源は、病気退散のためとは限らず、それぞれ固有の由来を持っている。

(祭りの都市から地方への伝播)

都市は、人の集中と往来とともに、情報が持ち込まれ、持ち込まれた情報が交流し、伝えられてゆく機能を担っている。また、都市では、絶えず新しい考えや技術が作り出され、それに伴って新しい情報が生み出される。こうした情報は、都市から地方へと伝わってゆく。

祭りについてもこのような都市から地方へ伝播する現象が見られる。そのような例として、祇園社系の神社の祭りや天神信仰に基づく祭りがある。

京都の祇園祭は、インドの祇園精舎の守護神とされる牛頭天王（ごずてんのう）と習合したスサノオノミコトを祭神とするが、京の町の人々がこの神を祀ったのは、平安時代の初め頃に疫病が流行し多くの人々が死んだため、その神威を借りて、疫病を退散させようとしたからであるとされる。この平安時代に祇園御霊会（ぎおんごりょうえ）と称して始まった祇園祭は、室町時代にはかなりの様式をもち、安土桃山時代に華やかさをまして江戸時代に至ったが、日本各地における祇園社の勧請とともに山車や囃子など京都の祇園祭の様式が伝えられてゆき、今では全国あちこちで祇園祭、祇園さんと呼ばれる祭りが見られるようになっている。

天神信仰は、菅原道真公の怨霊を鎮めるために平安時代に京都に北野天満宮を創建したことに始まるが、菅原道真公が学芸に秀でていたことから学問の神様とも呼ばれるようになった。この天神信仰が、以前からあった天の神への信仰と一体化して各地へ伝わり、多くの天神社が創建され、祭りが行われるようになった。このように都市で生まれた祭りが各地へ伝播し、その地で根付いたのである。

（都市化による祭りの変化）

戦後の都市化の中で変化した祭りもある。そのような例として、東京の神田祭、三社祭がある。これらの祭りは、神田祭が昭和 27 年（1952 年）に復活するなど

終戦後の混乱が収まった東京で威勢良く復活したが、1960 年代の高度経済成長の時期に賑わいを失い、神田祭に至っては、一時期「祭りができるのは今年が最後かもしれない」という声まで出るほどだったという。このような不振の原因として、この時期の日本人、東京人がモノの豊かさを懸命に求めており、古くからの祭礼のように長い時間をかけて作り上げられた文化の蓄積に目を止める心の余裕を失っていたことが挙げられる。

しかし、高度経済成長が一段落すると共に、モノからココロへと人々の視点が変わったのか再びかつての賑わいを取り戻したのである。もちろん、このような賑やかな祭礼の復活を可能にしたのは、伝統の維持発展を目指した関係者の努力があったからであるといえる。

（都市におけるハレとケの相対化）

神が身近にあった時代には、昼は人間の生活する時間であり、それに対して、夜は神の世界であった。一日は、神の出現する日没と共に始まり、人が活動を止める日暮れに終わるというものであった。古い祭りの中に日没とともに始まり、日の出とともに終わるものがあるのは、こうした昔の意識の反映である。また、12 月晦日の夕食を年越しということがあるのもこうした古い一日の考え方に基づくものであるとされる。

ところが、現代人は、夜の闇と静寂を追い払ってしまい、昔の神の時間にまで人間の生活を広げている。特に、現代の都市は明るい光で一杯であり、毎日が祭りといえるような状況であり、日本人が長

年にわたって持ってきたハレとケという生活のリズムが崩れてしまい、ハレが過剰になり、日常化しているといわれる。

しかし、生活をハレとケに分けるのは、我が国が農業社会であった時代には妥当するが、都市型社会にはうまく当てはまらなくなっているとも言える。農業社会においては季節感が大変重要な意味を持っていて、ハレとケは、農繁期と農閑期、あるいは秋の収穫の後といったように一年のリズムによって成り立っていたのであるが、農業を日々の生活としない人が圧倒的に多くなった現代社会ではハレとケはそれほど季節的に分けられなくなっているといえる。

（大都市における初詣）

大都市圏の有名な社寺が多くの初詣客を集めるが、これはなぜであろうか。初詣は、もともと古来の伝統的な正月行事であり、地方色の濃いものであった。しかし、現在では、人口の都市集中に比例して大都市圏の一部社寺への初詣客の集中が見られ、明治神宮の約310万人（平成17年）を筆頭に全国の初詣客数上位10社寺だけで全国の推定初詣者の約25%を占める。

伝統文化における初詣は、一年の初めに氏神（産土神うぶすながみ）に参拝することであった。人々は、その居住地域に氏神（産土神）をもち、一年の経過の中に織り込まれた大小の祭りを営み、初詣もその一つであった。ところが、都市への人口集中に伴い、故郷を離れ、氏神（産土神）とのかかわりを失った人が増加した。大都市部に住むこうした人々の多く

は、伝統文化における初詣の対象として、故郷の氏神（産土神）の代わりに求め、有名な社寺に参拝するようになったといえるであろう。

（「神なき祭り」 - イベント）

今日、特に都市部においては社寺と無関係の催し物（イベント）としての「祭り」も多く見られる。それらは、意図的に賑わいを創出しているものといえよう。

イベントは、いわば「神なき祭り」である。イベントも「祭」と銘打たれることが多い。「音楽祭」、「体育祭」、「学園祭」、「映画祭」、「文化祭」など様々な催し物が「祭り」と呼ばれる。こうした催し物が「祭り」と銘打たれているのは、多くの人々がそこに集まることによって賑わい、ハレの時間と空間が現れるからである。

本来の祭りとはこうしたイベントとの根本的な違いは、神の祭祀の有無である。祭りの基本は、神を迎え、神をもてなし、神を送る、ということである。祭りを営む者の意識の中心には神様がおられ、神が主役である。これに対して、イベントでは、主催者が意識するのは神ではなく、そのイベントに集まった客である。主催者は、どれくらいの客が集まったか、客がイベントに満足したかどうかといったことを気にする。また、イベントはハレの演出により、消費を促し、地域の活性化を図ろうとする仕掛けであり、商業的動機に基づくことが多い。なお、本来の祭りには、もともとはこうした経済的意図はなかったが、現在では地域活性化に役立たせよ

うとするところも多い。

また、イベントとしての「神なき祭り」の中には、地域の住民の地域への愛着や帰属意識を醸成しようとするものもある。この場合の主役は住民といえる。「神戸まつり」や「高円寺阿波踊り」などがこのような「神なき祭り」の例であり、それぞれ34年、49年続いており、まちの新しい伝統行事となっている。

参考文献

柳田國男『柳田國男集第十巻「日本の祭り」』筑摩書房、昭和44年

米山俊直『都市と祭りの人類学』河出書房新社、昭和61年

鶴見俊輔・小林和夫『祭りとイベントの作り方』晶文社、昭和63年

松平誠『現代日本祭り考』小学館、平成6年

小松和彦『祭りとイベント』小学館、平成9年

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/yasaka/Gionsin01.htm>

<http://www.kitanotenmangu.or.jp>